



昨年に続き、ゲストは梅佳代さん。参加者と共に歩いた。

今回のサミットは霧島山をとりかこむ鹿児島・宮崎両県にまたがる「環霧島地域」で開催される予定です。霧島市の前田市長が「花が取り持つ交流を続けたい。交流人口拡大を目指して頑張らしましょう」とあいさつし、サミットは閉幕しました。

翌5日には柳田植物公園で記念植樹があり、霧島市や館林などから4種類9本が植えられました。柳田植物公園をのりキリシマツツジの名所とする計画は、能登町総合計画策定のために平成17年12月に募集されたまちづくりのアイデアが基礎にあります。記念植樹にはこのアイデアを考案した橋田茂さん（宇出津）も参加し、「二順霧島」を植えました。「花の力プロジェクト」は新名所づくりに向けて第一歩を踏み出しました。

深紅の花咲く
能登の里山を満喫

猿鬼歩こう走ろう健康大会毎年9月に開催されてきましたが、今年からのとキリシマツツジの開花時期に合わせ、5月11日に開催されました。花を楽しむことができるよう、「歩こう」のコースを古木のある家を巡るように再編。1013人のランナーとウォーキング愛好家が里山の風景を楽しみながらさわやかな汗を流しました。

参加者は、梅佳代さんと会話をしながら歩きました。

アトラクションでは民謡歌手の杉山貞悦さん（夏目栄子さん・黒川）が「能登キリシマ節」などを披露。初夏の空に歌声が響きました。

「能登キリシマ節」を熱唱する杉山貞悦さん（右）



町花 のとキリシマツツジで 新たな飛躍

のとキリシマツツジで地域振興を図る「花の力プロジェクト」が始動し、能登空港では初の全国キリシマツツジサミットが開催、そして

「猿鬼歩こう走ろう健康大会」が花の時期にあわせて5月開催になるなど、のとキリシマツツジにとって節目の年になりました。



全国のツツジ名所と 交流の第一歩

「第1回全国キリシマツツジサミット」は5月4日、能登空港ターミナルビルで開催され、キリシマツツジ誕生の地鹿児島霧島市、ツツジの名所である群馬県館林市などから自治体関係者や地域づくり団体が参加しました。

花を通じた交流につとめる「キリシマツツジ親善大使」の任命式もあり、鹿児島霧島市の霧島ふるさと大使・野添由里子さん、町出身のジュエリーデザイナー四方静香さん、写真家・中乃波木さんの3人が任命されました。能登町とNPO法人のとキリシマツツ



▲親善大使の（左から）野添さん、四方さん、中さん

ジの郷などが推進する「花の力プロジェクト」実行委員会委員長の政田成利さんから3人に委嘱状が手渡されました。委嘱後、四方さんは空港の到着ロビーでのとキリシマツツジをモチーフにしたアクセサリー作りの講師をつとめました。



▲四方さんはのとキリシマの写真を使ったキーホルダー作りを指導した

基調講演では新潟県立植物園の倉重祐二副園長と島根大学生物資源科学部の小林伸雄教授が、それぞれの研究成果について発表しました。

シンポジウムでは倉重副園長がコーディネーターをつとめ、持木町長、前

田終止霧島市長ら5人がパネリストとして、キリシマツツジを通じて人々の交流とまちづくりについて意見を交わしました。長い歴史を持つキリシマツツジがどのように広がったのか、大学などの研究機関の協力を得ながら、世界遺産登録も視野に入れて活発に活動したいという意見も述べられました。

地域振興に向けてそれぞれの地域のキリシマツツジの花で地域の魅力を全国に発信すること、日本独自の文化遺産であるキリシマツツジの保護育成にあたるという2か条のサミット宣言が採択され、地域振興に向けて新たなスタートを切りました。



▲シンポジウムでは地域振興について活発に意見が交わされた

第28回 猿鬼歩こう走ろう健康大会結果

※順位、氏名（所属/地域）の順

〈1部〉ハーフ高校生～49歳男子

- ①松平功太（Rising）1:18:11 ②水上覚 ③石切大樹

〈2部〉ハーフ50歳以上男子

- ①大富宏一（加賀市）1:21:12 ②多間利一 ③中野正

〈3部〉ハーフ高校生以上女子

- ①佐々木恵里（富山県）1:27:05 ②中野徳子 ③谷内幸子

〈4部〉10km高校生～49歳男子

- ①大殿広和（鹿島郡）0:41:43 ②武田泰成 ③高木陽一

〈5部〉10km50歳以上男子

- ①岡田雅宏（珠洲市）0:38:55 ②森田達也 ③大西衛

〈6部〉10km高校生～49歳女子

- ①道下恵（七尾市）0:43:37 ②山口理恵 ③山之越澄江

〈7部〉10km50歳以上女子

- ①虎谷友江（かほく市）0:47:47 ②大橋ひとみ ③古谷紀子

〈8部〉5km高校生～49歳男子

- ①原田慎也（special）0:17:12 ②鶴竹大輔 ③佐藤雄己

〈9部〉5km50歳以上男子

- ①西村美津雄（ニシムラ設備）0:19:08 ②松山和能 ③田畑正村

〈10部〉5km高校生～49歳女子

- ①中谷晶子（鳳珠郡）0:25:18 ②山本和美

〈11部〉5km50歳以上女子

- ①酒谷洋子（珠洲市）0:24:57 ②田中夏奈子 ③上田千寿代

〈12部〉3km高校生以上男子

- ①山本勝久（野々市市）0:10:42 ②山本敏幸 ③金谷陽一

〈13部〉3km高校生以上女子

- ①松川文江（鳳珠郡）0:18:02 ②中橋和美 ③濱野幸子

〈14部〉3km中学生男子

- ①正木涼太（柳田中学校）0:11:37 ②雨池拓也 ③井林千裕

〈15部〉3km中学生女子

- ①石田夏那（柳田中学校）0:12:06 ②濱野美空

- ③国重李里香

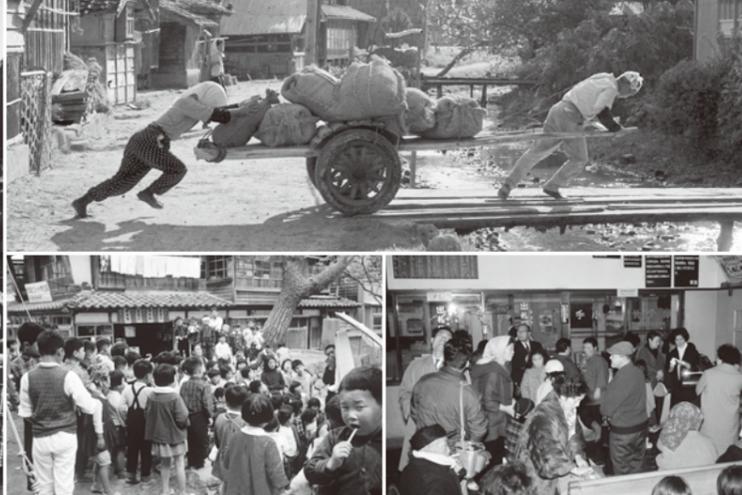
〈16部〉3km小学生男子

- ①田中郁晃（諸江町小学校）0:12:01 ②竹中聡 ③山崎大悟

〈17部〉3km小学生女子

- ①長谷川理歩（滝尾小学校）0:13:31 ②浦下悠衣

- ③濱野美生



能登回顧写真展

1955～64
宣教師ベックマンが観た
「能登の人・風土・生活」

〈期日〉 6月28日(土)～7月11日(金) (14日間)

〈会場〉 宇出津公民館 (コンセールのと) 多目的ホール

ベックマン一家は昭和30年から9年間、宣教師として宇出津に居住していました。妻の日出子さん、長女ヨバーン、長男ダニエル、次女ナオミの一家5人の生活模様をはじめ、キリスト教布教の傍ら撮影した、能登人の暮らしぶりや当時の年中行事、風景など、半世紀前の能登を知るうえで大変貴重な写真が氏から町に寄贈されました。郷愁を覚え、そして懐かしい人々にふれあう写真の一部を展示します。

寄贈写真の内容

写真はベックマン氏が9年間の能登での生活・活動の間を縫って撮影したものがほとんどです。日出子夫人の郷里である熊本を訪ねるなどした写真も一部含まれています。

ベックマン氏が貴重な写真を町に寄贈
ディビット・ベックマン氏(米国在住)が撮影したネガを、長男のダニエル氏が整理し、デジタル化。昨年夏、福井ナオミさん(次女・群馬県前橋市在住)を通じて町に寄贈されました。



被写体は「子どもたち」「風俗習慣」「布教活動」「家族」「漁業」「生活」「林業」「男たち」「自然」「農業」「女たち」です。写真データは展示会終了後、中央図書館で閲覧できるようにする予定です。

寄贈写真の総数：1350点

〈内訳〉

モノクロ写真	727点
カラー写真	355点
カラーズライド	268点

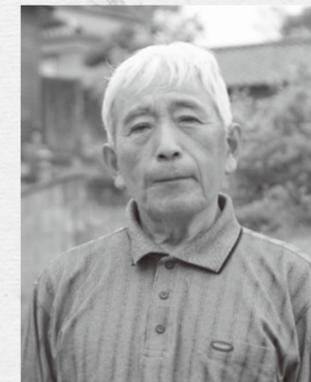
叙勲受賞者の声

4月29日に発表された平成26年春の叙勲をはじめ、町からは高齢者叙勲・危険業務従事者叙勲とあわせ4人が栄えある受章となりました。皆さんの功績を紹介します。

【瑞宝双光章】 橘重典さん(74)＝松波

保護司として30年以上にわたり、保護観察や仮出所となった人の更正を支援しています。「ひとりひとり抱える事情が異なり、私自身が勉強」と話すとおり、年に4回の研修会に加え、月に数回、対象者と面接するなど、きめ細やかな対応が求められます。

対象者の立ち直りを助けるほか、犯罪を未然に防ぐことも重要な仕事です。「社会を明るくする運動」の活動期間には自家用車にスピーカーを取り付けて街頭宣伝を行うなど、地道な活動を続けてきました。「周囲のバックアップがないとできる仕事ではなく、活動を長く続けられたのは皆さんのおかげ」と受章を振り返りました。



【瑞宝単光章】 諏訪富士朗さん(74)＝白丸

内浦町消防団の副団長を務めるなど、消防団活動に長年携わりました。活動においては「周囲の協力が大きかった」と話します。消火活動を終えた団員をねぎらうため自宅に招き、飲食が深夜に及ぶことも度々ありましたが「地域の力になれるように」と妻をはじめ、家族が支えてくれたそうです。このことが団員の団結につながりました。

退団後の平成13年に白丸地区で発生した林野火災の際には、交通整理など現役団員の後方支援にあたりました。地域の安全を見守るまなざしは今も変わりません。

【旭日双光章】 岩坂喜通さん(88)＝時長

昭和38年4月に内浦町議会議員に初当選し、議長、副議長を歴任するなど、平成18年10月までの通算31年7カ月間にわたって地方自治の発展に尽力しました。

昭和38年ごろ、道路は舗装はおろか砂利も敷かれておらず、大八車などがはまっていた様子を目の当たりにし、胸を痛めていました。議会議員に選ばれてからは町道や農道の建設・補修に励みました。整備された道路により「生活の改善につながったことがうれしかった」と議員生活の感想を述べました。



【瑞宝単光章】 松田政義さん(62)＝石井

昭和45年に陸上自衛隊に入隊し、20～21歳の頃にレンジャー部隊の厳しい訓練を経験。「何かあった時に乗り切れるという自信につながった」と話します。

昭和50年からは23年間の長い間、隊員の募集業務に携わりました。候補者の両親から入隊の同意を得るために、プライベートの時間を削って業務にあたることも。広報官として初めて入隊に関わった隊員が無事退官を迎え、今年5月にはその記念パーティーに招かれるなど、現在も強固な絆で結ばれています。今は地区の防犯委員として、地域の安全を守り続けています。